

世界に思いやりを

市原市立国分寺台西中学校 三年 太田 愛理紗

この世界には、さまざまな障がいをもっている人が大勢います。私の姉もその一人です。姉は生まれつき、脊椎の障がいで歩くことができません。移動するときは車椅子、それ以外はベッドで過ごしています。また、幼い頃から大きな病院で何度も手術を受けてきました。私にはきっと耐えられないような試練をたくさん乗り越えている姉を見て、私は世の中に対する考え方や見方が大きく広がりました。

私は幼い頃、障がいをもった人が集まるイベントに参加する機会が多くありました。当時の私は、障がいのある方とどのように接して良いのかわからず、戸惑いを隠せませんでした。あるとき、話すことのできない方を見て、「可哀想」と言ってしまったことがありました。つい、同情の気持ちで言ってしまった言葉でした。しかし、そのとき母から厳しく叱られたことを覚えています。母がなぜ怒るのか、当時は理解できませんでした。幼い頃の私は、疑問に思ったことや感じたことをすぐ口に出してしまうような子どもでした。年を重ねるごとにさまざまなことが理解できるようになり、発言して良いことと、そうでないことの判断ができるようになっていきました。姉は足が不自由で、苦勞することも多いです。しかし、今を楽しく生きている、そんな姉を見ていたら、「可哀想」という同情の言葉は失礼で、差別になると思うようになりました。今では、あのとき母が怒った意味がよくわかります。彼らに同情は必要ありません。可哀想だと思えることが差別になるのです。自分のことを一番わかっているのは本人です。事情も知らない私の一方的な「可哀想」という言葉は、差別的発言だったと、本当に申し訳なく思っています。

私は姉との生活を通して、障がいについて考えるようになり、いろいろな障がいのある方と関わってきました。中には、毎日が命がけという人もいました。どんな障がいをもった人も、一日一日を精一杯生きています。人は、一人では生きていけません。姉のように車椅子を使っている人は、行ける場所にも移動の仕方にも制限があります。最近の電車には、障がい者用のスペースがあったり、駅の階段にも

スロープが増えてきたりと、バリアフリーが整えられています。しかし、障がい者用のスペースに障がいのない人が乗っていたり、障がい者用の駐車場に車を止めたりする人もいます。このように、周囲の人たちの障がい者への思いやりや配慮が少ないと感じています。思いやりには、さまざまな形があります。私は、相手の立場となって考えたり、行動したりすることを心がけています。人に言われて悲しかったことは言わない、自分がされて嫌だったことは絶対にしない、そのうえで、相手がされて嬉しいことはどんなことだろう、相手は何に困っているのだろう、どんな助けが必要なのだろう、と常に想像するようにしています。これが私の考える「思いやり」です。

私は、これからも「思いやり」をもって、いろいろな人と接していける人になりたい。一人でも多く、障がい者への「思いやり」をもつ人が増えてほしい。

世界に「思いやり」が溢れることを願って。